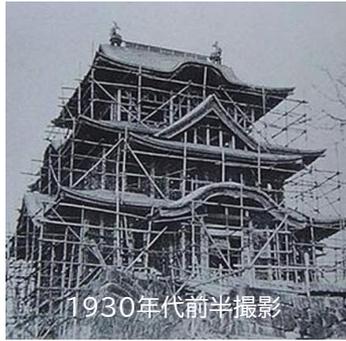






2024年6月撮影



1930年代前半撮影



配置図



南立面図

## ●伊賀上野城の歴史

伊賀上野城の起源は、天正9年(1581)に織田信雄の家臣・滝川雄利が築いた砦にさかのぼる。この地はもともと、平楽寺の跡地であり、天正7年(1579)の織田信長による伊賀天正の乱で焼失した後に利用された。天正13年(1585)に豊臣大名の一人である筒井定次が大和郡山から伊賀国に移封され、平楽寺のあった台地に近世城郭としての三層の天守を築いた。城は高丘の頂上を本丸とし、東寄りに天守を建て、城下町を古くから開けた北側を中心とした。この天守は、寛永10年(1633)の大雨風により倒壊するまで残っていたとみられる。しかし、筒井は慶長13年(1608)に失政を理由に徳川家康によって改易され、代わって伊予国今治から藤堂高虎が伊賀・伊勢に国替えとなり、築城の名手として大坂城包囲網の一環として大改修を命じられた。高虎は筒井の城を西側に拡張し、新たに五層の天守や堅固な高石垣を築くとともに、本丸南側に二の丸を設け、城下町も南へ移した。しかし、慶長17年(1612)9月2日の暴風で竣工直前の天守は倒壊し、その後、徳川方の勝利で幕を閉じた大坂夏の陣を経て、幕府による城普請禁止令が出されたため、天守が再建されることはなかった。高虎は筒井古城に城代屋敷を置き、一族を城代家老として入城させ、上野城は津藩藤堂氏の支城として幕末まで存続した。明治維新後に多くの建物が失われたが、城が小高い丘の上にあったため、他に転用されないまま、荒廃した城跡が残った。明治29年(1896)には地元の実業家・田中善助により城跡が整備され、上野公園として一般に開放された。さらに、地元出身の衆議院議員・川崎克が私財を投じ模擬天守を木造で建築した。昭和7年(1932)に着工、昭和10年(1935)10月18日に竣工した。この天守は、歴史的な天守を正確に復元したものではないため、伊賀地域の文化と産業の振興の拠点として「伊賀文化産業城」と名付けられた。

## ●概要

三重県伊賀市上野丸之内に位置する平山城で、伊賀盆地の中央部、標高約180mの台地に築かれた梯郭式(郭を階段状に配置した構造)の城郭で、かつての城下町の中心をなした。現在は国指定史跡であり、日本城郭協会選定による「日本100名城」の一つにも選ばれている。特徴的な高石垣は約30mで日本屈指の高さを誇り、日本一高い石垣とされる大阪城の本丸東面の石垣(約32m)に次ぐ高さである。この高石垣は特に本丸西面に位置し、敵の侵入を防ぐための防御機能を果たしていた。石垣の構造には打込みハギや算木積みといった高度な築城技術が用いられており、当時の技術の粋を集めたものである。天守の屋根の形が、鳳凰が翼を休めている姿に似ていることから、地元では「白鳳城」と呼ばれ、伊賀のランドマークタワーとして市民に親しまれている。木造三層の大天守と二層の小天守からなる複合式天守は、桃山風の築城法によるものである。大天守は高さ23m(天守台下から33.3m)であり三層三階、小天守は高さ9.54mであり二層二階となっており、大天守の一階には武器甲冑や伊賀焼など、二階に藤堂家ゆかりの調度や資料、川崎氏の作品などを展示し、三階の格天井には横山大観をはじめ各界著名人の1m四方の大色紙46枚の書画が豪華な絵巻を成している。また、構造上は三層目までの通し柱は設けられておらず、二層と三層の間に高さを調整する構造が設けられている。屋根構造は伝統的な和小屋ではなく洋小屋が採用されており、天守というよりも展示空間として意識して造られているため、内部には壁が少なく開放的な設計になっている。柱の総数は154本であり、その内三層目の一部の柱20本、および二層目までの通し柱12本が丸柱である。現在も本丸西側には高石垣や堀の遺構が残り、上野高校内には武庫、上野公園内には米倉、松尾芭蕉を祀る俳聖殿、芭蕉翁記念館、伊賀流忍者博物館がある。